

年間第4主日

マルコ 1・21 - 28

2018.1.27

高円寺教会 18:30 ミサ

クラレチアン宣教会 梅崎 うめざき たかいち 隆一神父

悪霊はイエスに向かって「神の聖者だ」と叫びました。確かにイエスは神の子ですから、それは正しい言葉です。そしてそこから分ることは、正しいことは悪霊でも言えるということです。

安息日に病人を治すことは律法で禁じられているという律法学者の意見も間違っていないです。しかし、正しいことを主張するために命を滅ぼすことを何とも思わないのであれば、そういった正しさから解放される必要があります。

そういった考え方が下敷きになっている言葉に「遠のき信者」、「怠り信者」などというものがあります。「日曜日に教会に来ないのは遠のき信者だ」、「ゆるしの秘跡をうけないやつは怠り信者だ」と使用されます。教会でしか使われない特殊用語です。特殊用語を使わず「黙想会に参加しないと世間体が悪い」という人もいます。日本の信徒の数は少ないので、世間はそんなことを知らないはずなのですが。

これらは本人の主観であり、その方々の信仰観から考えれば正しいことであり、常識なのかもしれません。しかしその考え方が自分自身や周りの人たちの生きる力にはなりません。

悪霊や正しさを主張する人々に反して、イエスは安息日であるにもかかわらず悪霊を追い払います。当時の人々にしてみれば非常識であり、悪しきことでした。

「旧約聖書の律法によれば、安息日にいかなる仕事もしてはならないと書かれている。だが、イエスは悪霊を追い出すという悪魔払いの仕事をしている。彼は間違っている。きっと彼には神様からの呪いがくだるに違いない」と思っていた。ところがイエスを通して神の業が現れました。

それを見ていた人たちは我を忘れるほどに驚きます。その驚きというのが、神聖なものに触れたときの驚きだった。しかし、神聖なものに触れても自分の正しさを捨てることはありませんでした。マルコの福音書では驚きはイエスを理解していない人たちの反応を表す言葉として使われているそうです。

信仰に熱心になると人によっては神様よりも教条主義を重んじ、掟を守ること、正しいことをすることが何よりも大切だと考えてしまう。しかし神様が望まれていることは、神様以外のものから解放されることでした。「正しさ」を神様よりも大事にしているときに、その「正しさ」から解放されるということが

人を神へと導きます。

「学力、軍事、経済、名声っていうのが人を救うんだ」という正しさに多くの人が取り憑かれています。その状態からわたしたち自身も解放されていく必要があります。神の働きに気付いて心の底から驚きが湧き出てきます。そしてその驚きから何を学び、どのように生きるのかが問われます。

悪霊に取りつかれていた男と同じように、わたしたちも解放を必要としています。今日キリストに出会ったわたしたちも解放の喜びを味わうことができますよう、共に祈りましょう。